

戦姫・戦王絶唱シンフォギア

ネプ音

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ギャラルホルンのアラートにより並行世界の危機を察知したSOG本部は、装者を送り並行世界の危機を打破しようと考へた。3人の装者が選ばれ並行世界へ向かうと、見たことのないノイズと、見た事のあるシンフォギアを纏つた見た事のない人がいた。さあ、響達は再び世界を危機から救えるのか!?

目 次

新たな幕開け	1
接触	
抜剣	
撤退	
同行	
もう一つのS. O. N. G.	
PTBモジュール ①	
番外編 韶と韶也の誕生日	1
番外編 韶と韶也の誕生日	2
PTBモジュール ②	
PTBモジュール ③	
クローズノイズ	

38 34 31 28 25 22 18 15 11 8 4 1

## 新たな幕開け

SONG本部には装者6名が全員集まっていた。

ギヤラルホルンのアラートが平行世界の危機を知らせた為だ。

ギヤラルホルンとは、並行世界同士を繋ぐ能力のある完全聖遺物である。

「先ほどギヤラルホルンがアラートを発した。君達には申し訳ないが、この中から3人に平行世界で問題を解決してきて貰いたい。」

源十郎がその言葉を発すると響が元気よく手を上げた。

「師匠！ 今回は私に行かせてください！」

「うむ、カルマノイズ発生の可能性を考えるとS2CAを使用できる響くんは適任だろう。あと2人は…翼くん、マリアくん、頼めないか？」

その言葉に、翼とマリアは少し申し訳なさそうに答えた。

「申し訳ありません。私とマリアは今、歌手としての活動予定が詰まっています。なので、今回はこちらの世界にいさせていただけると嬉しいです。」

「私からもお願ひするわ。」

今の時期は夏。様々なライブイベントが催される時期あり、当然の事ながら翼もマリアも引っ張りだこである。

そんな時期に並行世界に行っている余裕なんて二人にはなかつた。

残りのメンバーで並行世界へ行く人を決めなくてはいけない中、クリスが仕方ない感じで声を上げた。

「なら、私が行くしかねーな。このバカの面倒を見る先輩が一人は必要だろ？」

「酷いよクリスちゃん。」

雑な言葉で言っているが、クリスはいつもムチャばかりしている響が、また自分を犠牲にしないか心配なのである。響もクリスが心配してくれてる事を察しているため、バカと言われっていても笑顔でクリスに抱きつきに行つた。

二人がわちやわちやしているのを横目に源十郎は話を進めた。

「じゃあ、二人目は雪音くんに頼もう。あと一人だが…。」  
「私が行く。響さんとクリス先輩は、二人とも色々やりすぎで心配だから。」

源十郎の言葉に調が返答した。

すると、切歌が遮るように不満の声を上げた。

「ちよつと待つデス！ 調が行くなら私も行くデス！」

「切ちゃん、切ちゃんも来ると4人行くことになっちゃうよ？」

切歌の言葉に、調がすかさず突っ込みを入れる。

切歌が驚きを表情に出した。

「デデデデース！ なら、クリス先輩に変わつて欲しいデス！」

「それだと、響さんを止める人がいなくなる。」

「うう…でも私も行きたいデス！」

切歌が俯きながら悲しそうにそういうと、調は切歌の目の前まで近づき、目と目を合わせた。

「切ちゃん、未来さんが響さんの帰る場所のように、今回は切ちゃんが私の帰る場所になつて欲しい。そして、私の帰るべき場所を守つていて欲しいな。」

「調…。了解デース！ 調が気持ちよく帰つてこられるよう頑張るデス！」

切歌と調の周りがピンク色のオーラに包まれる中、話がまとまつた所で源十郎が装者に言つた。

「よし、では今日は響くん、雪音くん、調くんに並行世界に行つてもらおう。並行世界での危機に伴つて、こちらでも異変が起こるかもしかん。その時は、翼くん、マリアくん、切歌くんで対処を頼む。並行世界に行く3人は急いで準備してくれ。では、よろしく頼む。」

その言葉で装者は全員、各々がすべきことをやり始めるのであった。

その頃、ギャラルホルンの向こうの世界は…

ウー!!ウー!!ウー!!

けたたましいサイレンが建物内に鳴り響く。それはSONG本部のノイズを知らせる警報と同じものであつた。

声を荒げ、従業員の女性がその建物の司令の女性に言い放つ。

「クローズノイズ反応です。」

それを聞き、司令は少し顔をしかめながら隣にいる男の子に問いかける。

「最近クローズノイズの出現が多くなり、戦う事も増え疲れていると思うが、今回も頼めるか？」

「もちろんです！誰かが困っているなら駆けつけるのが僕ですから！」

そうやつて元気に返事をした後、男の子はクローズノイズと呼ばれたものが出現した場所に急いで向かつた。

出現場所に着くと避難誘導は終わつており、目の前には白色の姿をしたノイズが溢れていた。

「僕は戦える！この胸の歌がある限り！」

男の子はペンドントを取り出し、そして歌つた。

「——Balwissayail Nescessil gungnir  
tron——」

男の子の体が光に包まれる。そして、再び姿を見せたときには、体に黄色と橙色と黒を基調とした物を纏つていた。

そう、それは響がいつも身に纏つている物。その名も

「撃槍・ガングニールだああああああああああああああああああああああ!!!!」

## 接触

「3人とも、準備はいいか！」

ギヤラルホルンがある部屋に、響、クリス、調が集合したところで、源十郎が平行世界に行く3人に問い合わせた。

「どんな所か分からないですけど、全力でやつてきます！」

「こいつらの面倒は、私がしつかり見るから安心しな。」

「問題ないです。」

3人とも気合い十分な様子で、首を縦に振り答える。

それを見て、源十郎の横にいたエルフナインが真剣な顔をして3人に言つた。

「向こうでどんな事が起こっているのか、まだ定かではありません。十分に注意して行動をして下さい。」

今までに行つた平行世界では、シンフォギアを使つただけで拘束されたりなど、予想もしない出来事が起つたりもした。

流石にシンフォギアを使わないなんて事は出来ないが、慎重になるに越したことは無いと考えての発言だった。

「了解！心配してくれてありがとう、エルフナインちゃん！」

「僕は助言くらしいか出来ませんから。」

「そんな事ないよ！シンフォギアの難しい事、私には全然分かんないもん！いつも助けてもらつてるよ！」

「響さん…。」

響が屈託のない笑顔でエルフナインに言うとエルフナインもニコリと笑い返した。

会話の終了を確認すると、源十郎は装者3人に向かつて優しく告げた。

「3人とも気を付けて行つてくるんだ。無事帰つてこいよ！」

「はい！行つてきます！」

「任せとけ！」

「いってきます。」

「こうして、響、クリス、調は平行世界へと旅立つのだつた。」

「着いたー！」

平行世界に着くと、響が大きな声と共に伸びをした。

クリスと調は空を見上げ、ある事を確認していた。

「どーやら、この世界でもルナアタックは合つたらしいな。」

「そうですね。月が欠けています。」

そう、クリスと調は空高くに浮かぶ月を確認していたのだ。  
ルナアタックがあると無いとでは、世界の流れが大きく違つてくる  
からである。

「ルナアタックが合つたつてことは、私達の世界と同じ流れを辿つて  
る可能性が高いつてことだよな？」

「でも、その後の出来事が全て同じはず無いですね。」

「そうだな。まあ、今のところ何もわからんねえつてこつた。」

そんな話をクリスと調がしていると、響が会話に飛び込んできた。

「何も分かんないなら、取り敢えず分かるまで歩くしかないね！」「

「このバカは、また考え無しに物言いやがつて…」

クリスが反論しようとすると調がその言葉を遮るように言つた。

「先輩、ここは響さんの言う通り、この世界の事を少しでも知る為にも  
動いた方がいいと思います。」

「ぐつ…、確かにそうかもな。」

調の一言により、クリスは少し顔をしかめながらも、響の意見に賛成したのだつた。

確かに、何が起きるか分からぬ世界に来た為、慎重にならなくて  
はいけないのだが、そのせいで何も出来ないのは本末転倒というもの  
である。

響は考え無しに言つたのであろうが、現状から考えるとそうするの  
が一番妥当と言えた。

「クリスちゃんが私の意見に賛成したー！」

「うるせえ！ほら…さつさと行くぞ。」

「ちよと待つてよ。クリスちゃん。」

「私も。」

響がクリスの横に行きニコニコしていると、クリスが顔を赤らめながら1人で先に歩いて行つてしまい、響と調はそれを小走りに追つていくのだつた。

しばらく歩くと、3人は市街地に着いた。

街の雰囲気は響達のいる世界とあまり変わらないようだつた。

市街地を散策していると…

「…はあ！」

…ドン！ドン！バコーン!!

かすかだが声と戦闘音が聞こえる。

「誰かが戦つてる！」

「おいバカ！まつ…」

「——Balwissya11 Nescess11 gungnir  
tron——」

クリスが制止するよりも早く、響が歌いだした。

響の体が光に包まれる。そして、ガングニールを纏つた響が姿を見せた。

「私、行つてくるね！」

そう言うと誰の意見も聞かず、響は音のする方へ駆けて行つてしまつた。

「あのバカ！来る前に言われた事聞いてなかつたのかよ。」

「分かつてても体が動いちやうのが響さんですから。」

クリスと調はそんなことを言いながら、先に行つてしまつた響を追いかけた。

響にはすぐに追いついた。響の前にはモクモクと煙が上がり、戦闘音がしないことから戦いはもうすでに終わつたのだというのが窺えた。そんな中、響は一点を見ながら静止している。

「おい、どうした？」

「何かあつたんですか？」

その言葉に響は指を差しながら答えた。

「クリスちゃん、調ちゃん、あれ。」

二人とも指差された方を見つめる。煙が少しづつ晴れていき、中から一人の男の子が現れた。

髪は栗色でショートカット、くせつ毛なのかセットしているのか後ろ髪がピヨンピヨンとはねている。

背丈は170前後だろうか、3人とは結構な差がありそうだ。

だが、響はそんな事に驚いていたのではない。彼の格好である。

その男の子は、黒色のマフラーをし、体は黒、黄色、橙を基調にしたもので覆われていた。

色合いは少し違うが、3人はこれをよく見知っていた。

「男の…。」

「ギャングニールの…装者…。」

二つの世界の装者の運命が交わった瞬間だった。

## 拔剣

「男の…。」

「ガングニールの…装者…。」

響達がそう呟き、眺めていると男の子が顔を上げた。

男の子は、人影を捉えたときは驚いた顔をしたが、響の姿を見ると

鋭い目つきに変わった。

「君が纏っているそれは、シンフォギアなのか…？」

男の子が響に問いかける。

「うん！私は立花響！好きな物はご飯＆ご飯！ガングニールの装者だよ！」

笑顔で自己紹介をし問い合わせた響に、男の子は鋭い目つきのまま言い放つた。

「ありえない、女の子が装者になる事は出来ないはずだ。それに…ガングニールの装者は僕だ！！」

男の子は素早く響に接近し、鋭い蹴りを放つた。

「うつ。」

急な蹴りに対応出来ず、響の体が宙を舞い、地面に倒れ込んだ。響を庇うかの様にクリスと調が二人の間に入る。

「いきなり何しやがんだ！」

「いきなり？前回僕の仲間に何をしたか忘れたとは言わせない！」

「はあ？お前が何言つてるかさっぱり分からねえな！」

「君達もあの哲学兵装を持つシンフォギア装者の仲間だろつて言つてるんだよ！」

「知らねえなあ。でも、あんなバカでも仲間だからなあ。私も黙つちやいられねえつてもんだ！」

「私もいきます。」

「——K i l l t e r I c h a i v a l t r o n ——  
——V a r i o u s s h u l s h a g a n a t r o n ——

クリスと調が聖唱を口づさむと、二人の体が光に包まれる。

そして、イチイバルとシユルシャガナを纏った二人が姿を表した。

「くらいな！」

「はあ！」

クリスが両腕にガトリングを装着し、超連射する【BILLION MAIDEN】を放ち、それに合わせて調がツインテールの部分から円盤型のノコギリを大量に発射する【 $\alpha$ 式・百輪廻】を放つた。遠距離攻撃でまずは距離を取ろうという作戦である。

しかし、男の子は斜め横に走つて移動し、二人の攻撃をかわしながらも距離を縮めてきた。

「君達もシンフォギア装者か…!!」

そう言い、素早く二人に接近した男の子は、二人に無数の突きと蹴りを叩き込んだ。

「ぐあ…。」

「くつ…。」

あまりにも素早く、重い攻撃に二人は膝をついた。

その時、二人の後で倒れていた響が立ち上がり、拳を突き出しながらギアから炎を噴射させ、男の子に突進に近い突きを放つた。

「うおおおおおおお!!!」

「うらああああああ!!!」

男の子は響の突きに合わせてガングニールのバネのようなものを伸縮させ、威力を増大させた突きを放つた。

2つの力がぶつかり合い、爆風と共に煙が舞う。

二人は互いに攻撃した向きとは逆の方向に吹き飛ばされた。

「ぐあ…。くつ！」

「ぐはつ…。ふつ！」

二人とも地面に体を打ちつけたが、すぐに立ち上がりお互いを見据える。

「どうして！なんで私達は戦わなきやいけないの？」

響が男の子に訴えかける。

しかし、男の子の鋭い目つきは変わらなかつた。

「さつき言つた通りだよ。自分達の胸に聞いてみなよ！」

そう言つて、男の子はペンダントに手を伸ばした。

ペンドントは響達の物とは形が違い、十字架の先が尖つた様な形をしていた。

男の子はそのペンドントの左右を挟み込むように持ち、強く中心に押し込み、首から取り外した。

# 「PTBモジユール、抜剣!!」

そう男の子が叫ぶと、ペンドントの左右から白い針が、中心から黒い針が胸側に伸び、男の子を貫いた。

男の子の全貌を黒い物が包む

にしたシンフォギアに変化した。

「何……これ……？ シンフオギア……なの……？」

そう呟くのも無理は無い。

男の子のシンフォギアは響達の知るシンフォギアとは形が掛け離れていた。

頭に付いていた2つのトゲのようなパーティは、多数に増えライオンの立髪のようになつていた。

顔もライオンの顔のようなヘッドギアで覆われ、口の部分から顔を覗かしている状態であつた。

手や足には鉤爪の様な物が付き、尻尾の様なものが伸びた先には刃  
が付いていた。

「がああああああああああああ!!!!」

男の子は雄叫びを上げ四つん這いになり、戸惑う響と対峙するのだつた。

## 撤退

「グルアアア!!」

男の子が響に向かって、手を振り下ろし鉤爪型の衝撃波を出す【獸変我流・月影爪波】を放った。

「くつ！」

すぐさま響は横へと飛び退き、それを回避する。

後を振り向くと衝撃波が消えるまでの間の地面が深く抉れていた。これは先程まで戦っていた人と同じと思つてはいけない。響は本能的にそう感じていた。

「大丈夫か!!」

クリスと調が響に駆け寄つて来る。

「クリスちゃん。うん、大丈夫だよ！」

3人は並び、目の前の異様なシンフォギアを見据える。

男の子が纏うシンフォギアの姿、雰囲気、強さ、それが3人にある事を連想させる。

「あれは…暴走してるんですか？」

調がそれを言葉に出した。

そう、目の前の男の子の姿は、暴走した響の姿を連想させた。

しかし、響が暴走した時には、シンフォギアの形にこれほどまでに大きな変化は起こつていなかつた。

それが3人を困惑させていた。

「難しい事はよく分からぬいけど、このままじやあの子にはきつと何も届かない。だから！」

そう響が言い2人を交互に見ると、クリスと調は響の言いたい事が分かつたように頷いた。

「私達もやるしかねえな！」

「いきましょう！」

そして、3人は胸にあるペンドントに手を伸ばし、叫んだ。

「「イグナイトモジュール、抜剣!!」」

胸のペンドントを横から挟み込むように握り、胸から取り外す。

「——Dai n s u r e i f u——

電子音の様な音声がペンドントから鳴り、3人の胸の方に針のような物が伸び、そのまま胸を貫いた。

3人の全身を黒いモヤの様なものが包む。

そして、全身を包んでいたモヤが形を変え、モードダイグナイトのシンフォギアになつた。

「待たせたなあ、犬つころ！」

クリスがボウガンを男の子に向かつて乱射する。

「ガア！」

男の子は手にある爪でボウガンの光の矢を叩き落としながら真っ直ぐ3人の方に突進してきた。

男の子は下から斜めに右腕を振り上げ3人を引き裂こうとするが、クリスは左に、調は右に、響は後ろへと飛び退き、その攻撃を回避した。

回避しながら調が【非常式・禁月輪】を放つた。

「これで決める！」

高速回転する丸鋸の中に入りながら調が男の子に突進する。

男の子がそれを横に転がりながら避けると、間髪入れずにクリスが腰から格納しているミサイルを出す。

「ぶつ飛びやがれ！」

複数のミサイルを同時に発射する【MEGA DETH PART Y】を放つ。

男の子は【獣変我流・月影爪波】をミサイルに向かつて放ち、それでも残るミサイルに向かつて、尻尾の先に付いた刃で相手を乱れ突く【獣変我流・乱撃槍刃】を放つた。

ミサイルを破壊したことにより爆風が起こり、男の子の周りに土煙が立つ。

「最速で、最短で、真っ直ぐに、私の言葉を伝えるためにいいいい！」

土煙の中にいる男の子に向かつて、響が全身に炎を纏い突進した。

男の子は両腕を交差し防御するが響に押され後退していき、壁にぶ

ち当たつた。

「グアツ……！」

壁に当たつた反動を利用し、響は上へと飛び上がり、腕に付いたブースターを噴射させ、男の子に蹴りを放つた。

「ガツ……！」

男の子は目を見開き、その後ぐつたりと脱力した。

「やつたか？」

クリスと調が響と男の子に近寄つてくる。

「多分……もう戦えはしないと思う。」

響がそう言い戦意が無い様子を見せると、何処からとも無く声が聞こえてきた。

「何……もう止めちゃうの……？ 甘い甘い……。君達甘過ぎるよ……。」

「誰!?」

響が後を振り向くと、ビルとビルの隙間から男の子がするりと出てきた。

男の子にしては長い黒髪の襟足を縛り、腰に刀を携え、八重歯が特徴的なその男の子は3人に向かつて話しかけた。

「君達さ……。殺らないんだつたら……。その子僕に頂戴よ……。」

「殺る? こいつ何言つてやがんだ?」

クリスが黒髪の男の子を睨みつける。

「わあく、怖いな……。睨まないでよ……。」

黒髪の男の子の目が少し鋭くなる。

「ガアアアアアアア!!!」

すると、いつの間に目を覚ましたのか、ギャングニールを纏う男の子が 3人を飛び越え、黒髪の男の子に向かつて突進して行つた。

「わあく、願つたり叶つたりだ……。」

黒髪の男の子は、落ち着いた様子でギャングニールを纏う男の子を見据える。

「ガアアアアアアア!!!」

ギャングニールを纏う男の子が、黒髪の男の子に向かつて爪を振り下

ろす。

チツ！

キンツ！

黒髪の男の子が腰の刀を抜き、ガングニールを纏う男の子の爪を受け、そのまま振り抜く。

「ガ、ガアアああああ…。」

すると、ガングニールを纏う男の子のシンフォギアが強制的に解除され、男の子は脱力して地面に倒れ込んだ。

「行くよ。」

黒髪の男の子が舌で唇を舐め、抜き身になつた刀を振り下ろした。ガキン！

「人を殺すなんて、しちやダメだ！」

その斬撃を、響が二人の間に入り受け止める。

「そつかゝ。君も僕の敵なんだね。」

そう言うと黒髪の男の子は刀をそのまま振り抜いた。

「ぐあああああ！何…これ…。」

すると、響のシンフォギアが強制的に解除され、そのまま響も脱力して地面に倒れ込んでしまった。

「響さん！」

「くそつーくらいやがれえ！」

クリスが黒髪の男の子に向かつて銃を乱射する。

黒髪の男の子は刀でそれを防ぎ、後ろへと飛び退く。

それを見たクリスがミサイルを黒髪の男の子に打ち込む。

「流石にミサイルは不味いな。」

そう言いながら、黒髪の男の子はミサイルを真つ二つに斬つた。辺りが爆風と土煙に包まれる。

それらが晴れるとその場には黒髪の男の子しかいなかつた。

## 同行

タツタツタツタツ…

「はあ…はあ…ここまでこりやあ大丈夫だろ。」

クリスが足を止め、汗を流し肩を上下させながら調に言う。

調は出していた足のローラーをしまい、クリスの横に止まつた。

「そうですね、追つてきてはいないようです。」

そう言うと、2人はお互いが抱えている響とガングニールを纏ついた男の子を道路に寝かした。

「それにしても、後から出てきた刀野郎なんなんだ…？ シンフォギアを強制的に解除しやがつたぞ…？」

「それに生身でシンフォギアと対等レベルに戦つていました…。もう何が何だか…。」

「こいつもこいつでシンフォギアによく分かんねえ機能が付いてるっぽいしな…。」

クリスは道路で横たわっている男の子を指差し言つた。

「置いてつて殺されたら寝覚めが悪いから持つてきちまつたけど、こいつも危ねえんだよな。」

「大丈夫…。きっと、その子は話せば分かつてくれるよ。」

声の方をクリスと調が向いた。

そこには、上半身を起こして頭を搔いている響がいた。

「ここまで運んでもらつちゃつてごめんね。」

「やつと起きたか、このバカ！ いきなりぶつ倒れやがつて…心配しちだらうが。」

「響さん！ 目が覚めて良かつたです。」

「心配かけてごめん…。でも、へいき、へつちやらだよ！」

そう言うと響は立ち上がり男の子の方を向き、そのまま男の子に近づいて行つた。

そして、男の子に馬乗りになると肩を叩きながら声をかけた。

「君！ 起きて！」

「おいバカ！ 仮にも意識失つてるやつになにするんだよ!!」

「大丈夫だよクリスちゃん！あの刀での攻撃は致命傷にはならないと思う！」

「はあ？ 何でそんなの分かるんだよ…。それに、その前にボコスカに殴つたのはお前だろ！」

「あ…そ…いえばそうだつたね。」

そう言つて馬乗りをやめようとした時だつた。

「うつ…ん…。」

「あ！ 起きた！ 起きたよクリスちゃん！」

無邪気に喜ぶ響の下で男の子が目を覚ました。

そして、響やクリス、調を見て、上に何が乗つてているのかを理解すると顔を赤らめた。

「う、うわあ～!!」

そう言いながら男の子が響を少し突き飛ばす様にしながら急いで立ち上がる。

「うおつと！ もく、いきなり立つたら危ないよ～。」

「き、君！ 君には恥じらいの心は無いの!?」

「そんな事無いよ！ こんな私でも恥ずかしい時もあるんだよ～！」

男の子はとても恥ずかしがりながら、響は全く恥ずかしがらずに話す光景を見て、クリスと調は、

(なんかどつちが女の子でどつちが男の子か分からぬ…。)

と思いながら立ち尽くしていた。

そんな状態の中ふと我に返つたクリスが話を切り出した。

「おい！ そんな事より、何か言うことがあるんじやねえか？」

そう言われると男の子は真剣な顔になつた。

「そうだね…。さつきは勘違いして襲いかかつてしまつて、本当にすみません。あと、助けてくれてありがとう。」

男の子が深々と頭を下げる。

響が言つていた様に、どうやら話が分かる相手らしいとクリスと調は感じた。

「まあ、分かりやいいんだよ。で、名前は？」

「僕ですか？」

何故?というような顔で男の子はクリスを見る。

「他に誰がいんだよ。ぶつちやけた話、私達もこの世界での仲間が欲しいんだよ。」

「この世界での?」

男の子が更なる疑問を顔に浮かべると、響が男の子の手を取った。  
「とりあえず!君の名前、教えて欲しいな!」

そう言われた男の子は、顔を蒸氣が出そうな程に真っ赤にして、顔を背けながら自己紹介をした。

「僕は響也。天塚響也だよ。」

「響也くんね!さつきも言つたかもだけど、私は立花響!よろしくね!」

そう言いながら響は繋いだ手をブンブンと振つた。  
恥ずかしさが最大になつたのか男の子は響の手を離してクリスと調の方を向く。

「ふ、2人の名前は?」

「私は雪音クリスだ。」

「私は月読調。」

「立花さんと雪音さんと月読さんだね。」

「立花さんなんてむず痒いよ。響つて呼んで!」

「じゃあ、ひ、響さん。」

そう言いながら響也は再び真っ赤になる。

そうなりながらも響也は疑問を3人に投げかけた。

「それで、さつき言つていた『この世界』つてどういう意味?」

「やっぱり気になるよね。実は…」

3人は響也に、平行世界から来た事やギャラルホルンのアラートの事を伝え、この世界の危機が迫つてている事を伝えた。  
「なるほど…。」

響也は少し考えるとこう言つた。

「そういう事なら、3人には本部に来てもらつた方がいいかもね。」  
付いてきて!と響也が言い、響也と3人は響也の所属する組織の本部へと向かうのだつた。

# もう一つのS. O. N. G.

コツコツコツ：

通路に4人の乾いた足音が鳴り響く。

「うわー、今までの道こつちの世界と全部一緒だよ。」

「そうなんですか？組織内部の人は違えど同じ組織だからでしょ？

？不思議ですね。」

響が歩きながら辺りを見回し驚きの声を上げ、響也が少し顔を赤めてそれに受け答えをする

「やつぱり、これはちょっと報告出来ねえな…」

「そうですね…。未来さんには天塚さんの事は黙つておきましょう…。」

響は全く気付いていないようだが、クリスと調から見れば響也が響に何かしらの好意を抱いているのは一目瞭然だつた。

その事を未来に伝えるかどうかを、少し離れながら小声で話し合つていたのだ。

「クリスちゃん！調ちゃん！何してるの？しつかり着いてこないど、もしかしたら迷子になっちゃうかもよ～？」

「あ、すみません。後見ていなくて…。」

響と響也が後ろを振り返り、クリスと調に大きな声で話しかける。

「あのバカは人の気も知らないで…。まあ、はぐれてもなんだし行くぞ。」

「はい、行きましょう。」

クリスと調が少し駆け足で追いつき、4人は響也の組織の司令室へと足を急がした。

ウイーン

4人か司令室へと足を踏み入れる。

司令室は響達の世界と同じように、大きなモニターと沢山のキー ボードや椅子が並べられ、様々な人が働いていた。

その中に1人だけあからさまに他の人と違う雰囲気を纏つた女の人がいた。

黒のパンツスーツの上着の前を開け、艶がかかった黒色ストレートの髪を腰まで伸ばし、少し吊り上がった目でモニターを見つめながら、棒付きキャンディーを舐めているその女の人に響也が挨拶をした。

「ただいま戻りました！輝夜さん、先程報告した3名をお連れしました。」

それを耳にすると、女の人は響也の方を向いて話しかけた。

「おお、戻ったか天塚。苦労をかけたな。で、そつちの3人が…」

「はい。先程報告した、違う世界から来たシンフォギア装者です。」

「立花響です。」

「雪音クリスだ。」

「月読調です。」

3人が順番に挨拶すると、女の人は3人の顔を見回し、口を開いた。

「私は雷轟輝夜だ。先程は天塚が世話になつたようだな、感謝する。」

そう言うと、輝夜は頭を下げた。

素直な感謝の言葉を受けて、クリスが顔を赤らめそっぽを向く。

「べ、別につ…、目の前でやられると私の目覚めが悪いから助けただけだ。」

「そうか、だが私の大切な仲間はそれで救われた。だから感謝する。」

そう言い終わると輝夜は頭をあげた。

そして、響達に向かつてニカリと笑いかける。

「君達はこの世界の情報が知りたいんだつたな？なんでも聞いてくれ！私達は君達を歓迎しよう！ようこそ、私達のS・O・N・Gへ！」

所属員全員が隠し持っていたクラッカーを盛大鳴らした。

今来たばかりの4人は状況をのみ込めず驚いた顔をする。

すると、4人の中で唯一この世界の住人である響也がいち早く平静を取り戻し突っ込みを入れた。

「輝夜さん！こういう事するならせめて僕には言つておいてくださいよ!!」

「あつはつはつ、すまんすまん。天塚はすぐ顔に出るから言わないで

おこうという事になつてな。」

そう言うと輝夜は響也の耳元に口を近づけ囁く。

「来る時の様子もカメラで見てたぞ？立花、可愛い子じゃないか。」

響也の顔がボンツ！と煙を出すほどに赤くなると、輝夜はニヤニヤと笑つた。

その様子を見ていた響がクリスと調に囁く。

「雷轟さんと響也くんつて仲いいんだね。付き合つたりとかしてるのはかな？」

笑顔でそんな事を言う響を見て、クリスと調はげんなりした顔をした。

「このバカはここまでバカだつたのか…。」

「響さん、流石に酷いです。」

「えー！絶対に響也くんは雷轟さんの事好きだと思うんだけどなう？」

響が考へている格好で言うのを見てクリスと調は、もしもの時に未来になんと言えばいいのかなどで素直に響也を応援できないとはいへ、少し響也を氣の毒に思つた。

「そんな事より、3人にこの世界の現状を。」

響也が顔を赤くさせたまま、響達が気になつていて話をふる。

「おお、そう言えれば色々説明するんだつたな。立花、雪音、月読。3人とも知りたい事は何でも聞いてくれ？」

輝夜が響達に向かつて言う。

「じゃあ、遠慮無く教えてもらおうか。」

そう言つてクリスが口を開いた。

「まずはコイツのシンフォギアについて教えてもらおうか。」

クリスが響也を親指で指す。

「分かつた。だが、そちらのシンフォギアの事も教えてもらうぞ？」「もちろんいいぜ。協力関係なのにこつちだけ情報貰おうなんぞ思つてねえからな。」

輝夜の問いにクリスが即答する。

響と調も問題無い顔をしている事を見ると、輝夜は話し始めた。

「じゃあ説明しよう。天塚のシンフォギアに搭載された力…PTBモジユールの事を。」

はたして、異世界の異端技術はどんなものなのか。

# PTB モジュール ①

「じゃあ説明しよう。天塚のシンフォギアに搭載された力：PTB モジュールの事を。」

輝夜が仰々しく言つた。

しかし、輝夜はすぐに笑いながら頭を搔き始めた。

「と言つても、私は詳しい事はよく知らん！」

その言葉を聞き、クリスがすぐに反論する。

「はあ？ 馬鹿言つてんじやねえよ！ じゃあ、どうやつてコイツのシンフォギアは作られたつてんだ!?」

「まあ、落ち着け雪音。私は詳しい事は知らん。だが、製作者はしつかりここに呼んである。」

フンッと言わんばかりに、クリスが腕を組みそっぽを向く。

「そういう事は先に言えつてんだ。」

「すまないな。今から呼ぶ。」

そう言うと輝夜は1人の人物に声を掛けた。

すると、その人物はコツコツと足音をたてながら4人に近づいた。

その人物の顔を見て、響が駆け寄つて笑顔で話しかけた。

「エルフナインちゃん！ この世界でもエルフナインちゃんがシンフォギアの調整してるんだね！」

それを聞いて、その人物は少し嫌そうな顔をして言つた。

「エルフナイン？ オレの前でその名前を出すな。オレの名前はキヤ口服・マールス・ディーンハイム。S・O・N・Gで異端技術の技術者をやらせて貰つている鍊金術師だ。キヤロルと呼んでくれ。」

その言葉を聞いて、響、クリス、調が驚いた顔でキヤロルを見る。

それもその筈、響達の世界でのキヤロルは、万象默示録を完成させるために響達と戦い、そして命を落としている。

もう再会する事は無いと思つていた人物との再会でし、響は目を滲ませキヤロルを抱きしめた。

「キヤロルちゃん…。本当に良かつた…。」

「なんだお前！ やめろ！ 抱きつくな！」

泣きながら抱きつく響と引き離そうとするキヤロルに、クリスと調が近寄つてくる。

「まあ、なんだ。良かつたな。」

「響さん、良かつたですね。」

クリスは頭を搔きながら、調は微笑みながらそう言つた。

その中心でキヤロルが叫ぶ。

「ああ、暑苦しい！おい、輝夜！コイツらどうにかしろ！」

それを見て輝夜がニヤニヤしながら言う。

「まあ、いいじゃないか。どうやら感動の再会らしいし？」

「オレはコイツらなんか知らないんだよ！くそ、離れろ！」

そう言いながらキヤロルは響の腕から逃げ出し、少し遠くに離れた。

響が涙を拭いている間に、調が質問する。

「キヤロル。さつきエルフナインの名前を出すなつて言つてたけど、エルフナインもこの世界にいるの？」

キヤロルはその質問をされ、悲しい顔で俯いた。

それを見て響也がキヤロルの前に出て、庇うように話し出す。

「それは僕が後で説明します！今は僕のシンフォギアの話をしましょう！」

ね？と響也が皆を見て笑いかける。

それを見て、3人は何かあつたのだろうと察した。

「キヤロル、ごめん。」

「いい。これはオレの問題だからな。」

調がキヤロルに謝り、キヤロルは気持ちを落ち着かせるように言つた。

キヤロルが顔を上げる。

「それで？PTBモジユールの事を聞きたいんだつたな？」

「やつと本題だな。一体なんなんだ、あのシンフォギアは？」

クリスがキヤロルに質問をする。

キヤロルが全てを話してもいいのか分からず、輝夜に目配せする

と、輝夜が頷いた。

それを見てキヤロルは、すべてを話してもいい事を理解し、話を始めた。

「まず、PTBモジュールの名前の由来から話そう。PTBは、The person turns into a beastの略称として使っている。」

「え、ざぱあそん…？」

響が全く分からぬ様な素振りを見せてると、キヤロルが溜息をつきながら、少し碎いた説明を始めた。

「凄く簡単に言うと獣の力を得るという事だ。オレはシンフォギアにある暴走の力に目をつけていた。」

「暴走を起点にしている所までは、私達のシンフォギアと同じなんですね。」

調が理解を深める為に聞く。

キヤロルは頷きながら答えた。

「そうだ。恐らくだが、使用したコアが異なっているんだろう。そつちでは何をコアにしたんだ？」

「魔剣ダインスレイフだな。」

キヤロルの質問にクリスが答える。

「ダインスレイフ…、生き血を吸う魔剣か。確かに、人為的な負の感情を引き起こすのに十分な呪いの力だ。オレも当初の予定では、ダインスレイフを使う予定だつた。」

昔を思い出すように話すキヤロルに、調が質問する。

「当初の予定…という事は、今は違う聖遺物をコアにしてるという事？どんな聖遺物を使つたの？」

調が質問を続ける。

「オレが最終的に使つたのはテイルフィング。願いを叶え、破滅をもたらす呪いの魔剣だ。」

モニターにテイルフィングの概要が出てくる。  
響達のまだ知らない聖遺物の力が今明かされる。

## 番外編 韶と響也の誕生日1

「うらああああああああ！」

夕暮れの街に響也の声が響く。

9月13日の17時過ぎ、響也は焦っていた。

「これでラスト!!」

ドカツ！シユワーン…。

目の前にいるアルカノイズを倒し、やつと終わつたと安堵した矢先、輝夜から連絡が入る。

「すまん、響也！アルカノイズを放つた鍊金術師の居所が分かつた。座標を送るから至急向かってくれ！」

それを聞き、響也は携帯の時計をチエックする。

（まだ行ける、まだ間に合う！）

「了解しました！急行します！」

そう言うと、響也は全速力でポイントに向かつた。

響也が何故こんなに急いでいるのかというと、時は数ヶ月前に遡る。

数ヶ月前

「そう言えば、響也くんって誕生日いつなの？」

響、響也、クリス、調での訓練が終わった後、響がふと響也に聞いた。

「え？ ぼ、僕の誕生日ですか？」

あまりにいきなり誕生日を聞かれたので、響也は驚いた顔をして、思わず聞き返してしまった。

そんな響也を目の前に響が笑顔で続ける。

「そう… そう言えば、聞いてなかつたなあつて思つて！」

その笑顔を見て、響也は少し顔を赤らめながら、俯いて言う。

「9月… 14日です。」

それを聞いて、響、クリス、調が驚き、顔を見合わせる。

「あ、天塚さん……。」

「お前、そりやあ…。」

調とクリスが驚き過ぎて言い淀んでいると、響が目を輝かせながら言つた。

「私の誕生日の次の日だあ!!!」

そう言つて、響が響也の両手を包み込むように握る。  
響也の顔がりんごの様に真つ赤になる。

「へ、へえあ？」

テンパリすぎて、響也から変な声が出る。

そんな響也を置いてきぼりにし、響が続けて言つた。

「よしつ！じゃあ、14日に響也くんの誕生日会をみんなでしよう！」

その発言を聞き、手を振りほどきながら響也が焦つて言う。

「ま、待つて下さい！僕のだけなんてダメですよ！そうするなら、僕も響さんの誕生日を祝わないと！」

すると、調が困ったような顔で言う。

「でも、恐らく響さんの誕生日は私達の世界で行いますし……。」「そつか、そうですよね……。」

うーん、と響也が悩んでいると、響が思いつき顔で言つた。

「そうだ！響也くんの誕生日会を13日に私と一緒にやろう！」

それを聞いた瞬間、クリスと調が固まる。

響也が来るという事はつまり、響也と未来が会うという事。

未来に響也の思いを知られたら何が起こるか分からぬい…。

2人は目を合わせ、どうにか何も起こらざり終わる方法を必ず考えようと決意した。

そんな心配している2人を他所に、響は響也の小指と自分の小指を絡ませた。

「約束だよ！」

そして現在9月13日、響也はアルカノイズを民間人や悪徳企業に売ろうとした鍊金術師を追い詰める任務にあたつていた。

アルカノイズの力を世間に広めてしまえば大変な事になる。

その為、響也は鍊金術師の捕獲と、ばらまかれたアルカノイズの回収、又は撃破を命じられていた。

「くそ…。早く終わらせて行かないと…。」

そう咳きながら駆けていると、先程送られてきた座標近くで逃げようとしている鍊金術師を発見した。

「輝夜さん、鍊金術師発見しました。捕縛します。」

「よし、頼んだぞ！」

通信が終わると同時に、響也が鍊金術師に素早く近づき、突きと蹴りを合わせた3連打を放つた。

それをまともにくらい、鍊金術師が後ずさる。

「くつ、もう追い詰められるとは……。」

そう言うと、鍊金術師は数十体のアルカノイズを放つた。

それを見て響也が叫ぶ。

「こつちは急いでるんだ！どけええええええええ！」

響也が胸元のペンドントに手を伸ばす。

「P T Bモジュール、抜剣!!」

そう言い、十字の左右を指で強く挿んだ。

「——T y r f i n g——」

電子音の様な音声がペンドントから鳴り、白と黒の針の様なものが響也の体を突き刺す。

響也の全身を黒いモヤが包む。

そして、黒いモヤは形を変え、響也はモードビーストのシンフォギアを纏つた。

「ガアアアアアアアアアア!!」

響との約束を果たす為、響也はアルカノイズの大群に迷わず突っ込んでいくのだつた。

## 番外編 韶と韶也の誕生日2

今日は9月13日、響の誕生日だ。

S・O・N・Gの食堂は、クリス、マリア、切歌、翼が飾った装飾で華やかに彩られ、真ん中のテーブルには未来と調の作つた色とりどりの料理が並び、皆が和気藹々と話をし、笑い声に包まれていた。そんな中で1つの大きなため息が聞こえた。

「はあ～」

「どうしたの響？」

響が大きなため息をつき、それを聞いた未来が心配して近くに来る。

「お誕生日会…楽しくない？」

少し悲しい顔をしながら未来が響に問いかける。

それを聞いて、響が両手を前に出してワタワタさせた。

「た、楽しいよ！未来や皆が用意してくれたパーティーだもの！樂しくない訳ないよ！……でも。」

そう言つて、響が少し下を向く。

未来がそんな響の顔を覗き込みながら問いかけた。

「でも、天塚くん来ないなって？」

「うん…。約束…忘れちゃったのかな…？」

そう言いながら悲しそうな顔をする響の肩をそつと抱き寄せ、未来が響に言う。

「大丈夫、きっと来るよ！私は、天塚くんは響との約束は絶対に破らないと思うな。」

そう言いながら未来は、今度響也に会つたら響を悲しませた事について怒らないと、と思つた。

そして、未来は響の手を引いた。

「ほらー！今日は響が主役なんだから！みんなの所行こ？」

「うおつと、未来そんなに引っ張らないでよ～」

そう言つて、みんなの和の中に響と未来が入つていった。

その頃、平行世界では……

「ひいー、こんな怪物がいるなんて聞いてねえ！」

鍊金術師が尻もちをつきながら後退りする。

その目の前には、月光を黒の体に反射させながら近づく、モードビーストのシンフォギアを纏つた響也がいた。

数十体のアルカノイズを相手に1歩も引かず、1人で全てのアルカノイズを蹴散らしたのだ。

響也は尻尾をウネウネさせ、そして鍊金術師にその尻尾を素早く巻き付け、そして締めつけた。

「く…そ…。」

そう言うと、鍊金術師は意識を失った。

そして、響也はそのままS・O・N・Gへと猛ダッシュした。  
S・O・N・Gに着くと輝夜が待っていた。

輝夜の姿を見て、響也はシンフォギアを解除した。

輝夜が、響也と鍊金術師を交互に見て言う。

「響也、ご苦労だつた。そして、済まなかつたな…今日は…。」

そう言って申し訳なさそうに俯く輝夜に響也が元気に言った。

「謝らないで下さい、輝夜さん！誰かが困っている時は助けなきやですし！それに…、まだ間に合います！」

輝夜はそんな響也を見て、驚いた顔をした後に笑つた。

「そうだな！よし、行つてこい！」

「はい！行つてきます！」

そう言うと輝夜は元気に駆けて行つた。

パーティーも大詰めになり、料理も少なくなってきた頃、響が未来に言つた。

「やつぱり私、響也くん迎えに行つてくるよ！」

「あ、響！」

未来が止める前に響は駆けだした。

その後ろ姿を見て未来がため息をつく。

「もう、主役がどつか行つちやつてどうするのよ…。響也くんに会いたいのは分かるけどさ…。なんか嫉妬しちゃうなあ。」

そんな独り言を言い、未来は皆にちょっと待つてもらえるように言いに行くのだつた。

「はあはあはあ…。」

響はギヤラルホルンのある部屋に急いで向かつた。

響也を迎えて行く為に。

そして、部屋に着くと、そこには人影が1つ。

「あ、ひ、響さん！あの、その…、遅れてしません…。」

響にあつた嬉しさと遅れた申し訳なさでテンパる響也がそこにいた。

それを見て響が少し涙ぐみながら言った。

「もう、待つてたんだから…。」

そう言うと響は響也の手を掴んだ。

響也が驚いていると、そのまま響は手を引っ張つて走り始めた。

「ほらー！みんな待つてるよ！行こー！」

そう言って笑う響を見て、響也も自然と笑顔が零れる。

そして、最高の誕生日を迎える為に、2人は一緒にパーティー会場に向かうのだつた。

## PTB モジュール ②

「テイルフィング…。願いを叶え、破滅をもたらす呪いの魔剣…。一体、どのような聖遺物なの？」

調がキヤロルに向かつて聞く。

モニターを見る。と言いながら、キヤロルは説明を始めた。

「テイルフィングは北欧神話に出てくる魔剣だ。どんな願いも3度叶えるが、同時に所有者の身を滅ぼすとされている。オレは呪いの力と願いを叶える力、2つの能力がある事に目をつけ、テイルフィングをコアに使用する事を決めた。」

それを聞いたクリスが反論する。

「待てよ。願いと呪いがあるのは分かつたけどよ、それが何で獣の力と関係あるんだ？」

するとキヤロルは溜め息を吐きながらクリスに言う。

「お前は待つという事が出来ないか？説明は最後まで聞くことだ。」

「な…、なんだとお?！」

「まあまあ、クリスちゃん。」

「雪音さん、落ち着いて。」

馬鹿にしたような態度を取るキヤロルに、クリスが掴みかかろうとし、響と響也がそれを止める。

キヤロルはそのままクリスを無視しながら話を続けた。

「呪いの力は願いの大きさに比例して強くなる。願いは3つしか出来ない。一度した願いは二度と消えない。この3つがテイルフィングの特徴だ。願いの代償として払わなければいけない呪いを使つて人為的に暴走を起こしている。」

「呪いの力を使用するだけならダンスレイフと何も変わらないと思う事？」

静かに頷きながら聞いていた調がキヤロルに問いかける。

すると、キヤロルは首を横に振り、調に言つた。

「いや、違いはある。」

それを聞き、調は首を傾げる。

「違ひ？どんなもの？」

すると、キャロルは少し考えながら調に問いかけた。

「ダンスレイフを用いたお前らのギアは、装者の理性を保つためにセーフティが設けられ、段階的にセーフティを解除し、出力を上げる事が出来る様に設計してあるはずだ。違うか？」

「うん、段階ごとに出力を上げられるように設計されている。」

調が問い合わせに領きながら答えるのを見て、キャロルは、やはりな、と言いつづける。

「そこがダンスレイフとテイルファイングの違いだ。テイルファイングは、願いの力に比例して呪いの力も上がってしまう。もちろん、逆も然りだ。つまり、呪いの力を人為的に抑え込むと願いの力も抑えられてしまう。だから、PTBモジュールにはセーフティは組み込まれて無い。」

それを聞き、抑えられているクリスが少し前のめりになりながら問い合わせる。

「つまり何か？天塚は、あのとんでもねえ破壊衝動を、自分の力だけで抑え込んでるってのか？」

それを聞き、キャロルがまた溜め息をつきながら、クリスの方を向き言う。

「何度も言わせるつもりなんだ。話を最後まで聞けと言っているだろう。お前は学習出来ないのか？」

それを聞きクリスがプルプルと震え出す。

「ク、クリスちゃん？」

響が少し焦りながらクリスに呼びかける。

「チツ

そんな音が聞こえた気がした。

「クリスちゃん！流石にここで蜂の巣はまずいよ！！」「おいバカ!!天塚!!離せ!!!私はこいつを蜂の巣にしなくちゃならねえ

「クリスちゃん!!流石にここで蜂の巣はまずいよ!!」「そうですよ、雪音さん！事件は困りますよ!!」

そう言いながら、暴れるクリスを響と響也がより強く抑える。

キヤロルはその光景を見て、再び溜め息をつき、調に向き直って、説明を続けた。

「暴走を制御するというのは必要事項だ。それが無いと本当に暴走してしまうからな。そこで、1つ目の願いを自分の精神の制御とした。願い分の呪いは受けるが、そこで発生する暴走を願いの精神制御によつて制御し、尚且つ願いの力で制御している為、出力は落ちない。ここまでで、機能としてはお前達のシンフォギアとほぼ同等の力の物になる。利点は、セーフティを設けてないから、時間制限が無い事。欠点は、ダンスレイフを用いたギアよりも己の精神に頼るシステムになるから、暴走の危険がより大きい事だな。」

「そして、残り二つの願いを使用し、さらに強くなれる。それが獣の力とも関係してる?」

調がキヤロルの話を聞き、続くであろう言葉を言う。

キヤロルは少し嬉しそうに笑いながら調に聞く。

「お前、月読とか言つたな?」

調が領きながら答える。

「そう、月読調。」

キヤロルは響とクリスを指さし言う。

「お前は、あそこの理解度の無いバカと、話を聞かないせつかちとは違うようだ。気に入った。これからは月読と呼ばせてもらう。」

そう言いながらキヤロルは説明を再開した。

「月読の言つた通り、残りの2つの願いを使用し、さらに能力を上げられることが最大の利点だ。そして、それが獣の力…、モードビーストに繋がつてくる。」

モニターの画面が再び変わり、2つの波形を映し出した。

「月読、これが何かわかるか?」

「ごめん、分からない。」

少し俯きながら調が言う。

「まあ、仕方が無いだろう。これは天塚がモジュールを抜剣した時の脳波とライオンの脳波だ。」

遂に謎に包まれた部分が解き明かされる。

## PTB モジュール③

「天塚さんがモジュールを抜剣した時の脳波とライオンの脳波…？凄く…似てる。」

調はそう呟きながらモニターを凝視した。

調の言葉につられ、暴れていたクリスとそれを抑えていた響もモニターに目を移す。

モニターに映し出された波形は、完全に重なり合わないにしてもほぼ同じ形をしている。

「暴走状態は一体どういう状態だとお前らは考えている？」

モニターを見つめる3人にキヤロルは尋ねた。

「そりやあ…、破壊衝動に呑まれて正気を失った状態だろ？」

クリスが言い、響と調が頷く。

イグナイトモジュールを使っている事もあり、暴走に対する知識が響達に無い訳では無い。

しかし、その答えに対してキヤロルは、そうじゃないと言わんばかりに話を進めた。

「確かに暴走状態と言うのは、破壊衝動に呑まれて正気を失っている状態だ。だが、オレが聞いているのは正気を失っている状態とはどういう状態なのか、という話だ。」

キヤロルの言葉を受け、響達は首を傾げた。

キヤロルが何を話したいのかが理解出来ないのである。

クリスと調は難しい顔をしながら頭を回し、響に至つては頭から煙が出てきていた。

「難しい話は分かんないよ…。」

響が言うとキヤロルはやれやれと言いながら、響を無視して話を続けた。

「正気を失っていると言うのは、理性が無いという事だ。理性が無いという事は、本能で動くという事。つまり、暴走状態とは増幅した破壊衝動に身を任せ、本能のままに動く状態という訳だ。」

「つまり、避けるのも攻撃するのも、全て本能で感じたままに動いていけた。」

るつて事?」

調がキヤロルに言うとキヤロルが頷く。

「今、月読が言つた通りだ。そして、普段からそのように動いているのが、数々の獣という訳だ。オレは暴走時の天塚の脳波を取り、それと類似している脳波の獣はいないかを調べた結果……」

「それがライオンだつたわけだな。その獣の能力のトレースを2つ目の願いにした訳だ。」

クリスがキヤロルの説明の途中で口を挟んだ。

それを聞きキヤロルが小馬鹿にしながらクリスに言う。

「それだけでの出力のギアが作れる訳が無いだろ? 天塚がほぼ暴走状態に陥つて戦つていたにも関わらず、ダインスレイフのギアを纏つた3人がかりでやつと気絶させたんだろう? それを獣の能力のトレースだけで結論付けるとは、やはりせつかちは浅はかでいけない。」

キヤロルがそう言い放つと、それを聞いたクリスが再びプルプルと震え出す。

「ク、クリスちゃん? 大丈夫だよ! 私なんか理解も出来てないし!」

響が焦りながらクリスに呼びかける。

プチっ

再びそんな音が聞こえた気がした。

「やつぱり私はこいつを蜂の巣にしなくちゃならねえみてえだ!!!」

「ク、クリスちゃん!? もう1回落ち着こ!」

「だから、事件は困りますつて!?」

「お前ら離せつ!! 離せつて言つてんだ!!」

暴れるクリスを響と響也が再び抑える。

それを見ながらキヤロルが再び溜息をつく。

「やはり月読以外は話しても無駄みたいだな。」

「響さんもクリス先輩もいい人だから、きっとその内仲良くなれると思うよ。」

「そう言う話をしているしてい訳では……。まあいい、話を続けよう。」

調の言葉を受け、チラリと響とクリス、響也の方を向き優しい目を

したキヤロルは再び話を続けた。

「さつきあのせつかちが言つた通り、天塚の脳波はライオンと一致した。しかし、その能力をトレースさせるだけで、願いを1つ消費するのでは物足りないと俺は考えた。そこで目をつけたのが……星座だ。」

「星座？ 星座に力そんな力があるの？」

調がキヤロルに問いかけると、キヤロルは説明を始めた。  
「天に輝く星には、星の命と呼ばれる膨大な生命エネルギーが巡っている。オレはそのエネルギーに目をつけ、シンフォギアシステムの出力の増大を図った。星座は様々な物がモチーフにされているのは知つてるな？」

調がコクリと頷くのを見るとキヤロルは説明を続ける。  
「その中の獅子座はライオンをモチーフにしてある。つまり、オレはテイルフィングの2つ目の願いとして、獅子座に巡る星の命の1部をエネルギーとして取り込み変換する事を選んだ。」

そう言うキヤロルに向かつて調が疑問を投げつける。

「そんなに強いエネルギーを取り込む願いとなると、代償となる呪いも強大になるんじゃ……？ それに、星の命はそんなに簡単に取り込める物なの？」

「1部をと言つただろう？ 不完全な人間が星の命を全てを扱うのは、テイルフィングの強大な力を持つてしても不可能だ。しかし、星座から漏れ出す1部をエネルギーとして取り込み、変換する事ならテイルフィングで可能だ。」

調が首を傾げる。

「星座から漏れ出す？」

「月読は黄道十二星座を知つてているか？」

キヤロルの問に対し、調が首を振る。

キヤロルはまあ仕方ないと言いながら調に説明を続けた。

「黄道十二星座とは太陽の通り道とされる12の星座の事だ。これらの星座は他の星座よりも強い星の命を持ち、漏れ出したエネルギーが地球全体に降り注いでいる。それを大気中から取り込む事で天塚

のギアは出力が上昇すると共に、獅子座の恩恵によりライオンの能力をトレイス、ギアの変形に至っている。」

それを聞いて、クリスと調は響也のギアの変化に納得したようだつた。

だが、とキヤロルが言葉を続ける。

「あまりに星の命の力は強大でな。現段階では破壊衝動の制御も力の制御も足りていらない状態だ。だから、普段は1つ目の願いの力だけ使うようにと言つていいのだが……。天塚……、何故オレの言う事を聞かなかつた……？」

キヤロルから放たれる殺氣を感じ、響也がクリスを抑えるのをやめ後ろに後ずさる。

「いや、あの時は仕方なかつたつて言うか……、頭に血が上つていたつて言うか……。」

そう言う響也の胸ぐらをキヤロルが掴む。

「問答無用だ！お前には今から、オレの言う事を聞かないという事がどういう事かみつちりと教えてやる！」

そうキヤロルが言い放つのと同時だつた

ウー！ウー！ウー！

サイレンの音が鳴り響く。

「クローズノイズ反応です！」

従業員が輝夜に言う。

「キヤロル、すまないが天塚の教育は後にしてくれ！天塚！行けるな！」

「はい！行けます！！」

そう言うと、響也はキヤロルの手を振りほどき、現場へと急行した。

「私達も！」

「ああ！行くぞ！」

「はい！」

そう言い、響也も響也を追い現場へと向かうのだった。

# クローズノイズ

市街地の空の上、響達はヘリコプターから直下を見下ろしていた。  
どうやら被害は未だ広がっているようで、悲鳴や破壊音があちこち  
から聞こえてくる。

早く助けに行かなきや！」

そう言い、響が飛び降りようとするが、響也がそれを止めた。

一待つて下さい  
響さん！下をよく見てください！」

下を? · · · 何あれ? ドーム状の · · · 透明な壁?』

響が下を覗き込みながら言う。

よく見ると被害が出ている区域は全て、ドーム状の透明な壁で囲まれていた。

戸惑う3人に響也が言つた。

「先程の話と今の行動から察するに、響さん達の世界ではクロースノイズは出現して、な、みそ、です。」

「さう、お、まつめかうクローズリイズ

力・ノイズとは違うのか?」

クリスが疑問を投げ掛けると響也が説明を始めた。

「そうですね。クローズノイズは、ノイズやアルカ・ノイズと性質が大きく異なります。まず、姿はノイズを蝋人形にした様な姿をしています。また、ノイズの様な炭素転換やアルカ・ノイズの様な分解は行いません。その代わり、転生と閉鎖と言う能力があります。閉鎖は空間に透明な壁を作る能力、転生は人をクローズノイズに変える能力です。」

「人を・・・ノイズに・・・!?

響也は心配そうな顔をしながらも説明を続けた。

「クローズノイズは特殊な音を発していて、至近距離でその音を聞くと人体がクローズノイズに調律されてしまうんです。また、クローズノイズが発生させた壁は微妙に振動していて、触れた物を光へ変えて

します。ですが、シンフォギアを纏つていればこちらの音で調和出来ます。ですので……」

「……でシンフォギアを纏えば問題ねえって事だろ？」

そう言うとクリスが胸のペンドントに手を掛けた。

「——K i l l t e r I c h a i v a l t r o n ——」

クリスが聖唱を口ずさみ、体が光に包まる。

そして、イチイバルを纏つたクリスが姿を表した。

「響さん……、私達も……！」

「ああ……、うん！ そうだね！」

「僕も行きます！」

「——B a l w i s y a l l N e s c e l l g u n g n i r t r o n ——」

「——V a r i o u s s h u l s h a g a n a t r o n ——」

3人の体が光に包まれ、シンフォギアを纏つた姿が現れる。

「それでは、行きましょう！」

そう言うと、響也はヘリコプターから飛び降り、拳に力を込めた。

「うおおおおおおおお!!!」

ガキッ！ パリイイイイイイン……。

透明な壁に響也の拳が突き刺さり、そして碎けた。

「おい！ 恍けてないで行くぞ！」

「響さん！」

クリスと調に言われ、響は俯いた顔を前へと向けた。

「そうだね……、皆を助けなきや！」

そう言い、響達も響也に続き戦地へと飛び込んだ。

まだ見ぬ敵の待つ、戦地へと。